

マージナルな存在のナンセンスな愛

徳山拓一（森美術館アソシエイト・キュレーター）

COVID-19によるパンデミックは、「なんだって起こりうる」という、不条理で、残酷でもある世界の「本当の姿」を私たちに示したといえる。約束が裏切られたように、私たちの日常はいとも簡単に書き換えられていった。緊急事態宣言の最中、急用のために平日の渋谷へ行った時、見渡す限り本当に誰一人いなかった風景は今でも忘れられない。つい先日までその場所を歩いていた数万人の日常が奪われたことを意味する光景でもあった。そんなことが起こるなんて誰が思っていたのだろうか。そんな世界を、私たちはどう生き、それにどう対峙するべきなのだろうか。

パンデミックの中で山本篤の映像作品をあらためて観たとき、画面の片隅に映り込んでいる些細な事柄が気になった。田畑の水路や住宅街の電線、シケた駐車場に生い茂る雑草など、ありふれた都市郊外の風景の部分なのだが、そうした細部と全体とを行き来していると、それらの事柄こそが山本の作品に豊かな情感を、リアリティを与えていることに気がついた。そして、そのリアリティを通してみる山本の作品世界は、現実とは別のところにあるフィクションなのではなく、それ自体が私たちの世界の一部であるように映った。ゴッホ風の太陽の絵をコートの内側に描いた謎の男（《晴れて、タイ》、2013年）も、郊外の駐車場で犬のぬいぐるみをかぶせたラジコンでつまらなそうに遊ぶ若者たち（《2dogs》、2010年）も、ウィールの無いスケートボードに挑戦し続ける男（《不可能性の可能性について》、2008年）も、この世界のどこかに存在している。彼らは、日常の些細な事柄や細部によってリアリティが与えられた「マージナルな存在」といえるかもしれないが、確実に存在するのである。

山本の創作の根底には「私たちはどんな世界に生きているか？」という問いや、「『変わること』と『変わらないこと』は同義である」という考えがあるという。世界は常に変わり続け、同時に変わらない。世界は親しみのあるもので、同時に、見たこともないものなのである。変わり続ける世界で、変わらない大切なものに目を向けることの切実さが、作品制作の根幹をなしている。

しかし、不条理で残酷なこの世界で、「変わらないもの」を見つめ続けるというナイーブな姿勢はどのように可能なのだろうか。その一つの方法論が、山本の作品の登場人物に示されている。彼らが共通して持っている、愚直な真摯さや、度を越した信念、言い換えるならば、何が起きても動じない（もしくは、気づかない？）「ナンセンスな愛」のようなものである。つまり、「マージナルな存在」の「ナンセンスな愛」をもって世界に対峙すること、それは、何が起きようが、全てを受け入れながら、この世界を愛することを意味するのかもしれない。山本の作品には、そうした博愛的な視点、世界の愛し方が示されているのだ。だからこそ、山本篤は、なにが起きても、世界の片隅で映像作品を量産し続けるのである。

初出 [『ATSUSHI YAMAMOTO | 山本篤 decade | 十』\(p.128\), ハンマー出版, 2022年](#)

本テキストの無断転載・無断使用を固く禁じます。